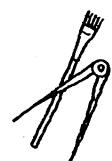


日々の想い



ずいそう

登山から見た

宗教社会

佐々木 健臣



東西二大勢力の冷戦構造が無くなつた途端に吹きだしてきた民族紛争や宗教紛争は、幾度となく抗争の悲劇を歴史的に積み重ね、知性も文化も発達した近代社会にとってしても終局的には、こうした力と力による紛争に至ることが必要悪なのかどうか、私にとっては、なかなか理解しかねる部分が多いところである。

私は、以前にアフガニスタンでの三ヶ月間にわたる山旅で多くの人達と接してきたが彼らの生活規範は、全て回教の教えによって規制されており、学校においても宗教の科目は大事にされ、教科書には、アラビアの教えは勿論、礼拝の仕方まで事細かに書かれてあつた。役所のお役人も時間になると一斉に仕事を止め、メツカに向かつて礼拝を、バスの運転手は車を止めて道端で、我々の雇ったポーター達も出発の合図をするたびに長々とお祈り、こんなことを一日に五回もやられると時間稼ぎだらうと腹立たしくもなつてくるが、夕日に向かつて朗朗と響くコーランのなかで熱心にお祈りをしている彼らの姿を見ていると、こうした悠久の時間の流れの中で、ゆつたりと生きていく方が幸せなのかも知れないといつしかそう思ふ様になつていた。

また、女性はチャドルを頭からすっぽりかぶり、顔を見せないという

ことは少なかつた。これは、夫以外の男性には絶対に肌を見せてはいけないという厳しい戒律があつて、夫は子孫繁栄のためか、力があれば与えよという教えの拡大解釈か、ま

うで、それが男のかい性とはどこかの国でも聞いたような気がするが、ボーテーの親方は、立ちよる先々の部落に妻子がいたのには感心した。治安については中央政府の行政が行き届かないせいもあってか彼等は貧しい生活ながら自衛のためにライフルやピストルを持つており、ターバンを巻き、ライフルを背にさつそと馬にまたがつて谷間を駆け抜け行く姿は、まさに誇り高き騎馬民族であつた。かつてソ連が七年間にわたつて占領を試みたが果たせず撤退して行つたがアフガンの地形と彼らの行動力から当然のことと思われた。ただ、残念なことには、ソ連の撤退後、そのままゲリラの派閥抗争に発展、いまだに内戦が続いていることである。

ギラッティ I 峰（六八五六m）にアタック、未踏の北稜ルートからの登頂に成功したが、この山名の由来は、

よりは、成人の女性の姿を見かけることは少なかつた。これは、夫以外の男性には絶対に肌を見せてはいけないという厳しい戒律があつて、夫は子孫繁栄のためか、力があれば与えよという教えの拡大解釈か、または子孫繁栄のためか、力があれば与えよという教えの拡大解釈か、ま

うで、それが男のかい性とはどこかの国でも聞いたような気がするが、ボーテーの親方は、立ちよる先々の部落に妻子がいたのには感心した。治安については中央政府の行政が行き届かないせいもあってか彼等は貧しい生活ながら自衛のためにライフルやピストルを持つており、ターバンを巻き、ライフルを背にさつそと馬にまたがつて谷間を駆け抜け行く姿は、まさに誇り高き騎馬民族であつた。かつてソ連が七年間にわたつて占領を試みたが果たせず撤退して行つたがアフガンの地形と彼らの行動力から当然のことと思われた。ただ、残念なことには、ソ連の撤退後、そのままゲリラの派閥抗争に発展、いまだに内戦が続いていることである。

中近東からアフガン、パキスタンまでイスラム、インドはヒンズー、バングラデイシュは仏教と色濃く塗り分けられているが、インドには二割近くのイスラム教徒がいると言わ

れ宗教上の紛争が絶えない。